

# 霊宝館だより

題字・畚野光義師

霊宝館だより 第119号

平成28年7月7日発行  
和歌山県伊都郡高野町高野山306  
公益財団法人高野山文化財保存会  
高野山霊宝館  
電話 0736-56-2029  
URL <http://www.reihokan.or.jp>

## 利用案内

開館時間  
5月1日～10月31日  
8時30分～17時30分  
11月1日～4月30日  
8時30分～17時00分  
休館日 年末年始のみ

拝観料 大人 6000円  
高・大学生 3500円  
小・中学生 2500円  
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。  
専用駐車場あり



国宝 仏涅槃図（応徳3年（1086）金剛寺）（部分）

釈迦の入滅に際し、釈迦の周囲に集まり、嘆き悲しむ弟子達や獅子  
前期展示（七月九日～八月二十一日）まで出陳

## 第37回高野山大宝蔵展

### 「高野山の名宝」

7月9日（土）～10月3日（月）

## 第119号 目次

### 第37回高野山大宝蔵展のご案内

- 収蔵品の紹介93 ..... 2～3
- 高野山の古建築 第二十三回 ..... 4
- 高野山の考古学（十二） ..... 6～7
- 古絵図で巡る高野山探訪（その二） ..... 8～9
- 高野山の文書（九） ..... 10
- 高野山霊宝館からのご案内 ..... 11
- 霊宝館の庭園 ..... 12

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

第37回大宝蔵展

「高野山の名宝」

期間 平成28年7月9日(土)～10月3日(月)

前期 7月9日(土)～8月21日(日)

後期 8月23日(火)～10月3日(月)

※期間中、一部展示替を行います。



国宝 仏涅槃図 金剛峯寺 ※前期展示



国宝 紫紙金字金光明最勝王經 竜光院 ※前後期で入替

千二百年の歴史を誇る高野山には、大変多くの文化財が残されています。今回の大宝蔵展では、国宝 仏涅槃図(金剛峯寺)、紫紙金字金光明最勝王經(竜光院)、文館詞林(正智院)をはじめ、国宝、重要文化財を多数展示いたします。貴重な文化財から高野山の歴史を感じてみてください。

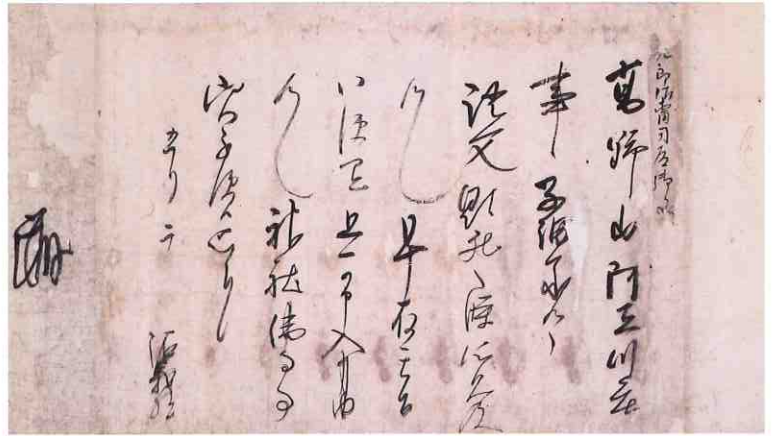
主な展示品

絵画

- 国宝 仏涅槃図 金剛峯寺 ※前期展示
- 重文 普賢延命菩薩像 正智院 ※前期展示
- 重文 八字文殊曼荼羅図 正智院 ※後期展示
- 重文 弁才天図 宝城院 ※前期展示
- 重文 一字金輪曼荼羅図 遍照光院 ※後期展示
- 重文 当麻曼荼羅縁起 清浄心院 ※前期展示
- 重文 九品曼荼羅図 清浄心院 ※前期展示
- 重文 弘法大師・丹生高野明神像(問答講本尊) 金剛峯寺 ※後期展示
- 重文 不動明王二童子毘沙門天図像 円通寺 ※前期展示
- 重文 阿弥陀如来像 成福院 ※前期展示
- 重文 毘沙門天像 光台院 ※後期展示
- 重要美術品 星供曼荼羅図 親王院
- 重要美術品 釈迦誕生図 金剛峯寺
- 重要美術品 釈迦八相図 金剛峯寺
- 重要美術品 釈迦八相図 宝亀院
- 重要美術品 高野山壇上并寺中惣絵図 金剛峯寺



重文 八字文殊曼荼羅図 正智院 ※後期展示



国宝 源義経書状(宝簡集三十三) 金剛峯寺 ※前期展示



千手観音菩薩立像 金剛峯寺



重文 蝶形磬 親王院

重文 重文 重文 重文 重文 重文 重文 重文

- 蓮華形柄香炉
- 孔雀文磬
- 蝶形磬
- 高野版板木
- 菊花牡丹文透彫箱
- 金剛盤
- 五鈷鈴
- 金板阿弥陀経
- 金剛峯寺
- 親王院
- 巴陵院
- 金剛峯寺

■ 工芸

重文 金銅仏具(独鈷杵・三鈷杵・五鈷杵)

金剛峯寺

重文 重文 国宝

- 紫紙金字金光明最勝王経
- 文館詞林
- 法華一品経
- 白河上皇高野御幸記(西南院文書)
- 豊臣秀吉朱印状
- 徳川家光朱印状写
- 西南院
- 金剛峯寺
- 金剛峯寺

■ 書跡

国宝 源義経書状(宝簡集三十三)

金剛峯寺

※前期展示

■ 彫刻

- 屏風本尊
- 千手観音菩薩立像
- 竜光院
- 金剛峯寺

収蔵品の紹介 93

和歌山県指定文化財

釈迦三尊像 三幅

室町（桃山時代）（十六世紀） 西南院蔵 紙本墨画淡彩

釈迦如来像（中央） 縦一二七・〇cm 横五二・三cm

文殊菩薩像（向かって右） 縦一二六・七cm 横五二・五cm

普賢菩薩像（向かって左） 縦一二六・八cm 横五二・六cm



普賢菩薩像

釈迦如来像

文殊菩薩像

釈迦如来を中心とする文殊菩薩・普賢菩薩の三尊像は彫刻・絵画ともに多くの作例があります。『法華経』を守護するほとけとして成立したこの三尊形式は、大陸での発現時期は明らかではありませんが、日本では平安時代後半に普及しました。獅子に乗る文殊菩薩（騎獅文殊）と白象に乗る普賢菩薩（騎象普賢）については『陀羅尼集経』や『法華経』に説かれており、単独でも信仰されます。高山山には密教の影響が強い、剣を持った童子の姿の騎獅文殊画像が多く伝わっています。

鎌倉時代以降、日本で禅宗が広まると、それに伴い中国のさまざまな文物がもたらされます。その中には宋や元の絵画、特に水墨画あるいは水墨画的技法で描かれた人物画・道釈画（道教や仏教に関係のある人物画）も含まれ、日本の絵画にも影響を与えました。本像のような水墨画の釈迦三尊像が描かれるようになったのは、こういった経緯が関係している

みられます。

今回紹介する釈迦三尊像は赤い衣をつけ、印を結び（右手…施無畏印、左手…触地印?）、岩座に坐す釈迦如来、白い衣をつけ右手に如意、左手に経本を持つ騎獅文殊、緑色の衣をつけ経巻を広げる騎象普賢からなり、それぞれの背後には白い光背が描かれます。曼荼羅に描かれるほとけとは違い、非常に人間臭い姿で、宋元画の影響が強くみられます。

筆者についてですが、三幅すべての下部（釈迦像は岩座内）に「永怡」と落款（印）があります。室町時代に雪舟等楊（一四二〇〜一五〇六）の系譜に連なる画人で、雲溪永怡（?〜一五七〇頃?）という人物がいました。周防・長門（山口県）を中心に活躍し、彼の筆とみられる絵画は二〇点ほどが現存し、その中には釈迦三尊像も含まれます。本像の印章と雲溪永怡の印章を比較すると、よく似たものがありますが細部は異なり、また画風は大きく異なります。そのため雲溪作品とは言えませんが、同時代や少し後の、和様化が進む過渡期の作例として貴重です。

なお、雲溪永怡と、江戸時代の資料に記される、彼と高野山との関わりについては『美術史』第百二十三冊（美術史學會、一九九三年発行）掲載の福島恒徳氏による論文「雲溪永怡―天文年間における周防の雪舟流―」に詳しく書かれていますので、興味のある方はご覧下さい。（福形安希子）

連載

高野山の古建築

第二十三回 金剛峯寺壇上伽藍 御影堂

鳴海 祥博



夜の御影堂 旧正御影供の前夜、法要が営まれる。夜の御影堂は幻想的だ。



御影堂の全景 右手の赤い柵で囲まれているのは「三鉢の松」。お大師様が唐から投げ放った三鉢杵がこの松に掛かっていたと伝えられる。奥は大塔。



御影堂正面向拝の詳細 虹梁、木鼻、墓股には彫刻が施され、垂木の先端などに沢山の飾り金具が取り付けられている。伽藍で最も装飾された建物である。



旧正御影供の日の御影堂 外部の障子を取り外され、この日だけは堂内の様子を窺うことが出来る。お堂の周囲には沢山のお花が供えられ、美しい。

壇上伽藍の御影堂はその名の通り、お大師様の御影、つまり弘法大師空海のお姿が描かれた肖像をご本尊としてお祀りしているお堂です。

この御影はお大師様の弟子の一人であった真如親王が描き、お大師様自身が目を点じたと伝えられています。以来この御影はお大師様の生きたお姿そのものとして信仰され、ここにお参りすればお大師様にお会いできると、今に至るまでお大師様を慕う人々のよりどころとなっています。

御影堂は、高野山が開かれたときには念誦堂といって、如意輪観音を祀りお大師様が日々念仏をされていたお堂だったと言われています。その後、御影が掲げられ、御影堂と呼ばれるようになりまし

た。御影堂にはお大師様が唐から持ち帰った法具や書籍、お大師様の著作や墨跡が納められ、その後奉納された数々の霊宝類や貴重な文書なども収納されるようになりました。やがてそれらはお堂の裏の土蔵に厳重に保管され、御影堂宝庫と呼ばれました。御影堂は信仰の上からも、そして宝物庫としても、高野山にとって最も大切なかけがえのない建物なのです。

その御影堂も三度火災に遭っています。現在の建物は天保十四年（一八四三）に大塔や金堂とともに焼失し、弘化四年（一八四七）に再建された四代目のお堂です。正面、奥行きともに柱間が五間で宝形造り、檜皮葺。全体に屋根が低く軽やかで優雅さを感じます。正面と側面のすべての柱間が部戸となっており姿は仏堂と言うよりは平安貴族の住宅を思わせます。しかし間近に寄ってみると住宅とは違います。素木で質素に見えますが、お堂の隅々まで実に沢山の飾り金具が散りばめられ荘厳されています。今は金具の表面が錆びて目立ちませんが、これらの金具が金色の輝きを取り戻したら、どれだけ光り輝いて見えるでしょう

う。まさにお大師様のお住まいに相応しく、お大師様への崇敬の念が建物全体に溢れています。

御影堂は普段は障子で閉ざされ、中の様子は容易に窺うことが出来ません。しかし一年に一回だけ、お大師様の御入定された旧暦三月二十一日の旧正御影供の際には、外部の建具が取り外され法要が行われるので、この時ばかりは堂内の様子を目にすることができます。普段閉ざされていることもあつてか、堂内は清らかで美しく、華やかに荘厳され、内部の壁にはお大師様を取り囲むように十二人のお弟子さまたちの肖像が祀られています。沢山の師弟を育てられたお大師様の偉大さと法灯の広がりを感じます。

旧正御影供の前日の夜、御速夜法要の終了後にはお堂に入って御影への参拝が出来ます。お灯明の揺らぐ室内はとも幻想的ですが、ほの暗い明かりのその奥におられる筈のお大師様のお姿は、いくら目を凝らしても残念ながら俗人の私には見えませんでした。

# 小仏塔の世界①

公益財団法人 元興寺文化財研究所

狭川 真一

納骨のお話の中で仏塔が何度も登場しましたので、これからは木造建築物を除いた高野山の仏塔、つまり奥之院や子院などから出土した仏塔や、永く祀られてきた小型の仏塔についてご紹介したいと思います。これらの多くは石で造られたもので、各種の塔形がありますが、総称して石塔と呼んでいます。

今回はまず、高野山における最古の石塔、なかでも五輪塔の最古例を探ってみましょう。

## 最古の五輪塔を探る

年号が刻まれた塔では、西南院に伝わる五輪塔に「建長八年（一二五六）」とあり、これが高野山最古の資料として知られています。しかし、山内にはこれより古いと考えられる五輪塔がいくつか存在しており、そ

れらは鎌倉時代前期から中期のものとみられ、すべて花崗岩で作られていることが愛甲昇寛さんによって指摘されています。

それではまず、建長八年よりも古いとされる五輪塔を個別に観察してみましよう。なお、五輪塔は各部の名称が決まっていますので、それを図1に示しておきます。

## 西室院五輪塔群

一心院谷にある西室院南側の庭園の一角で、石垣をもつ基壇上に三基の五輪塔が安置されています。源氏三代の供養塔と伝えられる塔で、古絵図にもそれと思われる記載があるものです。いずれも地輪が極めて低いのが特徴で、しかも左右に置かれる塔は、火輪の勾配が緩く、軒の裏面は膨らみが目立つものです。さら

に空輪が葱坊主のような形をしています。各部の表面には梵字や銘文などの記載はありません（写真1）。

調査をされた西山祐司さんは、これらの特徴から鎌倉時代初期から中期にかかると考えておられます。

なお、中央の塔はそれより少し時期が下ると考えられます。

## 明遍上人墓五輪塔群

蓮華谷にある明遍上人墓所とされる場所に七基の花崗岩製五輪塔が安置されています。今は部材が入れ替わっていますが、復元すると古いタイプの五輪塔が存在していることが分かりました。その中の一つに、先ほどの西室院左側の五輪塔に似たものが報告されています。図面上で復元されたものですが、地輪は低く、火輪は勾配が緩いため高さは低めで、軒裏面の膨らみが大きく、空輪が葱坊主のような形をしています。

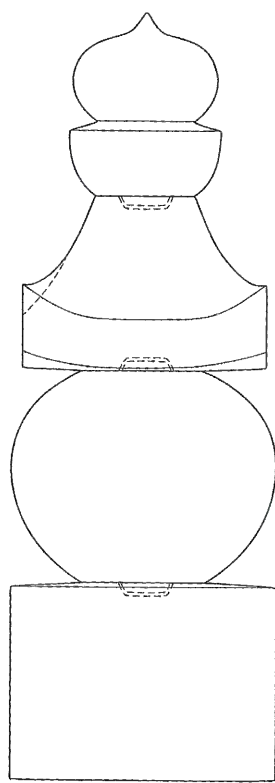


図1 五輪塔各部の名称

さらに表面には梵字も銘文もありません。このような特徴から、西室院左側の塔と同じ頃の製作と考えられます。

これらの石塔が、高野山の中で最も古の一群を形成すると考えて差支え



写真2 文覚上人墓五輪塔



写真1 西室院五輪塔 左塔

ないでしょう。

### 最古の五輪塔の類例を求めて

高野山最古の五輪塔を調査した西山さんは、西室院左側の五輪塔が京

都の影響を受けたものではないかと指摘されています。同じような特徴を持つ五輪塔に、京都市神護寺の文覚上人墓五輪塔があり、やはり花崗岩製です(写真2)。この塔も鎌倉時代前期に考えられています。同じ時期、奈良県や大阪府で作られる石塔は、凝灰岩製のものも多く、花崗岩製の塔はまだ主流ではありません。この点でも京都の影響を受けた塔という指摘は正しいと言えます。

では、西室院や明遍上人墓の塔は京都から運ばれたものでしょうか、それとも高野山で作られたものでしょうか。これはかなり難しい課題ですが、いくつかの事項を掲げて推定してみましよう。

高野山で花崗岩を使った石塔作りと言えば、町石の造営事業が知られています。詳細は別の回に紹介しますが、これは山内の石工だけでなく、外部からも複数の石工が招かれて、二百基以上の町石を文永二年(一二六五)から弘安八年(一二八五)の二十年間をかけて建設した大規模事業です。この頃、山内に建設された石塔は砂岩製が主流であり、最初に紹介した西南院の建長八年塔も砂岩製です。つまり一三世紀後半頃の高野山は、花崗岩製品の造営には外部の石工の力を借りないと製作できな

い環境にあったと言えます。別の視点からも見てみましょう。

前回まで紹介してきた納骨信仰の在り方をみると、鎌倉時代前期から中期頃は、輸入陶磁器や古瀬戸など限られた人々が保有した容器に遺骨を入れて、奥之院に納骨しています。これらは文献記録と合わせると、平安京の貴族階層に該当すると推定しました。つまり、平安京の人々と高野山のつながりは深く、少なくとも陶磁器は多数持ち込まれていることが分かります。

これらのことから当時の高野山は、花崗岩製の五輪塔を自力では製作できないものの、運び込まれる環境は出来上がっていたらと想定できます。京都の影響を受けた塔というのが素直な表現ですが、京都から運ばれた塔と言っても良いでしょう。

#### 【参考文献】

愛甲昇寛 一九七九「高野山の五輪塔」『元興寺文化財研究所年報』創立一〇周年記念論文集』元興寺文化財研究所

西山祐司 二〇〇二「高野山における初源期の花崗岩製五輪塔について」『紀伊考古学研究』第五号、紀伊考古学研究会

西山祐司 二〇一〇「高野山西室院源氏三代の五輪塔」『紀伊考古学研究』第一三号、紀伊考古学研究会

# 「古絵図で巡る高野山探訪」 (その一)

## 金剛峯寺—青巖寺と興山寺

高野山には、様々な時代の高野山の地理的状况を描いた「古絵図」が数多く残されています。今号からこれらの古絵図に焦点を当て、

また実際に現地を訪ね、現在と異なる点や過去と共通する点などを紹介し、過去と現在の高野山を往き来する旅へと誘います。



図1 『高野山壇上并寺中惣絵図』 一幅 寛政5年(1793) 金剛峯寺



図2 『同絵図』(詳細) 青巖寺と興山寺

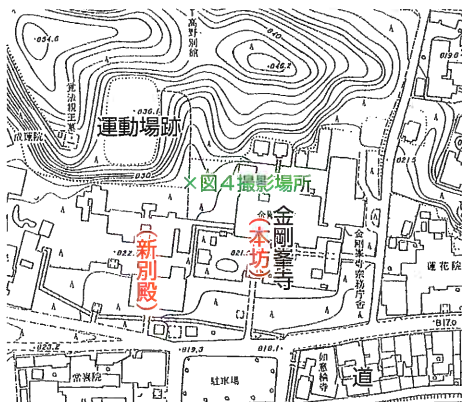


図3 金剛峯寺位置図

『高野山壇上并寺中惣絵図』(一幅 寛政五年(一七九三) 金剛峯寺 大宝蔵展(七月五日〜十月八日)にて出陳。以下、『絵図』といいます) (図1)の中心部には、現在の高野山内の寺院配置とは異なり、「青巖寺」と「興山寺」という大寺が並び(図2)、その周囲には夥しい数の子院(塔頭)が描かれています。これらの子院は、江戸時代には、学侶、行人、聖の三派に分かれています。学侶方は学僧、行人方は法会を執り行う僧侶、聖方は全国津々浦々に巡錫し、布教や高野山への勧進を募る僧侶の集団でした。

青巖寺は、文禄二年(一五九三)に豊臣秀吉が母の菩提を弔うために建立され、江戸時代には学侶方の本山となりました。しかし、明治政府の神仏分離政策の一連の動きの中で、寺社が一体となっていた高野山





図4 現在の金剛峯寺境内の旧青巖寺と旧興山寺との境界に付む道・石垣・築地塀。例年、4月末から5月初旬は石楠花が咲き誇ります



図5 旧青巖寺の建物を引き継いだ総本山金剛峯寺の本坊



図6 興山寺跡に建設された別殿（左側）、蟠龍庭（中央手前）、新別殿（中央奥）、奥殿（右側）

は再編制を迫られ、明治元年（一八六八）学侶、行人、聖の三派が廃止されました。

そして、翌年の同二年（一八六九）には青巖寺と興山寺が合併して真言宗の一寺院となった際、高野山が開創された平安時代以来の山全体の寺号「金剛峯寺」を称することになり、青巖寺の建物は総本山金剛峯寺の本坊となりました。

一方、興山寺は天正一八年（一五九〇）に行人方の本山として建立されましたが、明治元年（一八六八）学侶、行人、聖の三派が廃止され、行人方の本山としての機能を失いました。その後は、明治一九年（一八八

六）に高野山大学の前身となる「古義大学林」設置に伴い、その校舎は興山寺跡地と定められ、一部の施設は興山寺のものを利用しつつ、新たに講堂や寮などが建設されました。

そして、興山寺の北側にある徳川家の御霊を祀る東照宮は、明治二五年（一八九二）に建物が移転、あるいは取り壊され、その後運動場となり学生達がテニスを楽しんだといえます。

『絵図』でこの付近をみると、青巖寺と興山寺の境界を南北方向に道、また道沿いには石垣や築地塀が描かれています。この道は、両寺の北側の後背にある阿弥陀ヶ峯を南北

方向に通るメインロードで「阿弥陀ヶ峯の道」と呼ばれていました。

しかし、明治四二年（一九〇九）、金剛峯寺南側、現在の本山前駐車場にあつた子院や民家などが焼失したのを契機に、金剛峯寺の建物が火事にさらされたのは、この道が「火」の文字作りをしていることによるとの考えが広がり、同四三年（一九一〇）金剛峯寺と大学林の間の道は、興山寺北側の東照宮跡地に設けられていた運動場が当時の現況から二メートルも掘削され、この大量の土砂で埋め立てられました。

現在、金剛峯寺の本坊をご参拝されると、参拝者をお接待する新別殿

に行くまでの渡廊下の右手、北側を目をやると、両寺の石垣や築地塀が残され、当時の「阿弥陀ヶ峯の道」の面影を偲ぶことができます。（図3・4）

ちなみに、青巖寺の建物を引継いだ総本山金剛峯寺の本坊（大主殿）の建物などは、昭和四〇年（一九六五）和歌山県指定文化財に指定されました（図5）。

一方、興山寺は、その後の「古義大学林」が、同三三年（一九〇〇）に「真言宗聯合大学林」、同三四年（一九〇二）に「真言宗各派聯合大学林」、同四二年（一九〇九）に「真言宗聯合高野大学」、大正三年（一九一四）に「真言宗聯合高野山大学」、同四年（一九一五）に「真言宗高野山大学」、同五年（一九二六）に「高野山大学」へと、時代の変化に伴う法制度により、たびたび呼称が変化しつつも、長らく教育機関が置かれていましたが、昭和四年（一九二九）には現在の金剛峯寺の南側、現在の高野山大学がある場所に移転されました。

現在私たちが目にする「新別殿」や「蟠龍庭」などは、昭和五九年（一九八四）に執行された「弘法大師御入定一一五〇年記念大法会」の記念事業の一環として、建設されたものです。（図6）（鳥羽正剛）

高野山の文書 (九)

「豊臣秀吉朱印状」(金剛峯寺蔵) について



とよとみひでよししゅいんじょう

今回紹介する文書は、「豊臣秀吉朱印状」(金剛峯寺蔵)という文書です。朱印状とは、その名の通り朱色の印を捺した文書で印判状とよばれる文書様式の一つです。室町時代以前、武家の文書といえば花押をすえたものが一般的でしたが、戦国時代には印判状が各地の戦国大名に用いられました。なかでも、織田信長が用いた「天下布武」の朱印は有名です。印判状は朱印状、黒印状の大きく二種類に分かれます。朱印は厚札、黒印は薄札というのが一般的で、私事や軽微な用途には黒印を用いました。ちなみに、信長はこうした区別にとらわれず朱印、黒印を用いました。また、今回紹介する秀吉は朱印のみ用い、黒印は用いませんでした。

では、今回の文書の内容を見てみましょう。本文を翻刻すると次の通りです。

為音信巻数  
并縮三端到  
来祝着候猶  
休夢齋可  
申候也

九月廿八日 朱印  
金光院

この内容は、「進物として巻数と縮三端(反)到来し、喜ばしいことでした。休夢齋を送りお礼を申させます。」というものです。寺院に何かの祈願を依頼した願主に、祈願した時に誦誦した経典や陀羅尼の目録を献上するところが習慣となっていました。この目録を巻数と呼びます。縮は、縮織物のことで当時貴重な品でした。

次に出差人ですが、日下には朱印が捺されているだけで出差人の名前がありません。朱印の文字は読み取れませんが、秀吉の朱印であることが判明しています。宛先の金光院は、高野山一心院谷にあり、行人方の有力寺院だったようです。

使者の休夢齋について見てみましょう。休夢齋は、小寺休夢齋善慶(一五二五〜九四)という人物で、小寺休夢という名前で知られています。休夢は黒田官兵衛の叔父にあたり、秀吉に御伽衆(側近、相談役)として仕えました。この時も秀吉の御伽衆だったと思われる。

秀吉は大政所の菩提所として剃髮寺(のちの青巖寺。明治に興山寺と合併して金剛峯寺)を建立するなど高野山と深い関係を持ちました。この文書はそんな秀吉と高野山のやりとりの一つの事例を示す貴重な文書といえるでしょう。

(研谷昌志)

# 高野山霊宝館からのご案内

## イベント報告

### ◎ミュージアム法話

- ・5月1日(日) 金子良成師(富山・金城寺)
- ・6月4日(土) 白馬孝文師(長野・郷幅寺)
- ・6月25日(土)・26日(日) 天野高雄師(岡山・高藏寺)



ミュージアム法話の風景

文化財として展示している彫刻や絵画の仏像を、お坊さんの法話を通じて、解説しました。普段よく霊宝館に来館される方も、違った角度から仏像を見ることができたとの反響もあり、大変好評でした。

### これからの催し・展覧会

#### ◎ミュージアム法話

《日時》

- ・7月10日(日) 午前11時 吉武隆善師(大分・弘法寺)
- ・7月24日(日) 午前11時 長谷川惲也師(兵庫・長谷寺)



出土遺物洗浄作業風景

この度、霊宝館友の会会員の皆様を対象として、当館学芸員による「高野山の遺跡」と題した講演会と、高野山から出土した土器を中心とした「遺物洗浄」作業体験を企画いたしました。奮ってご参加くださいます

### ◎文化財ふれあい体験事業 埋蔵文化財の講演会「高野山の遺跡」・出土遺物洗浄作業

- ・8月20日(土) 午後1時 富田向真師(高野山高校教諭)
  - ・9月17日(土) 午前11時 長谷川惲也師(兵庫・長谷寺)
- 《場所》 高野山霊宝館
- 《ご参加される方は、拝観受付ののち、受付窓口前にお集まりください。》
- 《参加費》 無料。但し、拝観料(一般600円)が必要。事前申込は不要。
- 《お問い合わせ先》
- 高野山霊宝館 ミュージアム法話係  
(電話0736-56-2029)

ようご案内申し上げます。

《日時》 8月19日(金) 午後1時

※講演会(1時間程度)終了後、  
洗浄作業(2時間程度)

《場所》 高野山霊宝館

《対象》 霊宝館友の会会員

《募集人数》 20名(先着順。定員になり次第、申し込み終了)

《お問い合わせ先・申込先》

高野山霊宝館 霊宝館友の会係  
(電話0736-56-2029)

### ◎秋期企画展「真田丸」の時代と高野山

《日時》 平成28年10月8日(土)

平成29年1月15日(日)

《主な出陳品》

真田信繁(幸村)像 江戸時代

蓮華定院

轡・付属鎖(真田昌幸所持)

蓮華定院

江戸時代

成慶院

武田二十四将図 江戸時代

成慶院

和歌山県指定 真田幸村書状

蓮華定院

江戸時代



真田信繁(幸村)像 蓮華定院

### 霊宝館友の会会員の募集

高野山霊宝館では、「友の会」の



霊宝館本館 放光閣

会員募集を行っております。

拝観時に会員証を受付窓口でご提示いただくと、会員本人のほか同伴者3名様まで無料で何度でも入館できます。展示替えは年4回ありますので、博物館・美術館鑑賞がお好きの方には大変お勧めです。

また霊宝館や高野山の文化財の情報を掲載した機関紙「霊宝館だより」を年4回(予定)お届けいたします。さらに、伽藍の御供所で会員証をご提示いただきますと金堂と大塔の内拝が無料となります。皆様のご入会をお待ちいたしております。

《年会費》

一般会員(個人) 3,000円

賛助会員(法人) 30,000円

《お問い合わせ先・申込先》

高野山霊宝館 霊宝館友の会係  
(電話0736-56-2029)

お問い合わせ先 **高野山霊宝館** TEL 0736-56-2029(代)

霊宝館の庭園

# キリ・桐・桐の木・花桐

元高野山高等学校長 亀岡 弘昭

キリはゴマノハグサ科・キリ属の落葉高木です。

中国大陸中部が原産地というのが通説となっています。我が国に渡来した年代は不明ですが、平安中期には、よく知られていた樹と思われる、清少納言は「枕草子」の中で、桐の木の花が紫色であること、葉がひろがること、琴材となること、などを具体的にあげています。

植栽は広く行われ東北地方や関東



枝先の筒状花と葉

北部は良質の用材を産出し、特に岩手県は桐の花が「県の花」「南部桐」は有名です。高野山塊でも植えられたもの、野生化したものを見(観)ることが出来ます。

キリという和名の由来には、「切り」と「説」と、「木理」説があります。

前者は、この樹は幹が真直でないものを切り除いたり、用材として伐採(切る)しても、根際から新芽が出てよく生長する、後者は幹材の木理(木目)が美しいという特性があり、その木理を「きり」と呼(読)



筒状の幹

んだことによるといいます。別称には桐の木、白桐、花桐などが。

キリには、このように桐の字が慣用されています。その理由についても種々の説があります。そのうちには、初夏、枝先に房状に咲く筒状花により、筒は同に通ず、「花が筒・桐の木」、幹が筒状で真直に伸長するので「幹が筒・桐の木」があります。

キリの幹材は軽く軟らかくて材質が均質で細工しやすく、くるいが少なく木理が美しく吸湿性も少ない、などにより、

琴、箏や家具、各種の箱、下駄、各種の面などの製作に用いられています。

桐と高野山の関わりについては、高野山真言宗の宗紋、総本山金剛峯寺の寺

紋が桐紋と巴紋であることがあげられます。巴は植物とは直接の関係はありませんが夏の花の形から命名されたオトギリソウ科のトモエソウ(巴草)は高野山山頂部にも自生しています。

桐紋は、いくつかの例外を除いて桐の花と葉を組み合わせて図案化されたものです。

『家紋大図鑑』・樋口清之監修には百五十四の桐紋が紹介されています。

高野山真言宗の宗紋、総本山金剛峯寺の寺紋は、「五三桐」に相当します。「五三桐」にも種々ありますが、気品とおちつきのある端正な紋章です。

キリは落花の後、夏の間に充実した卵形で先の尖った果実は、秋には翼のある種子を飛散させます。その果実殻は冬も枝先に残るものも。

秋の落葉には、無常ということを実感します。